

11 祇園・円山

古都の深層

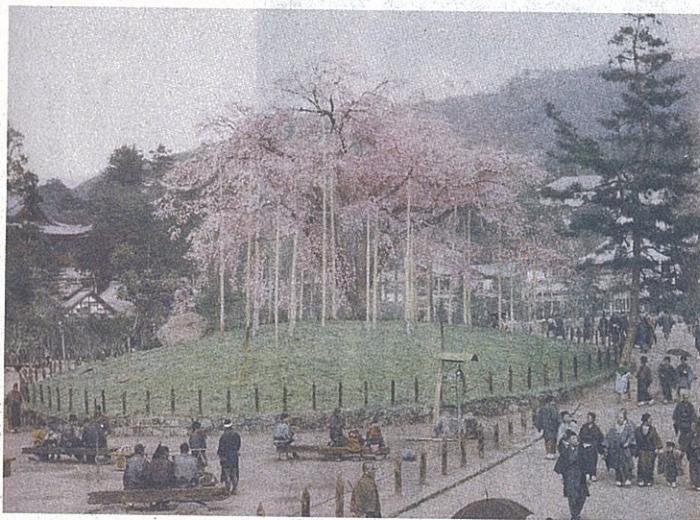
秘められた場の歴史

高木 博志

東京の銀座に匹敵する、明治初年の京都の文明開化の場といえれば、円山であろう。明治5(1872)年に京都博覧会で入京を許された外国人たちは、円山周辺に宿泊した。明治前期、八坂神社の南正門前の中村楼と藤屋、山腹の安養寺の塔頭であった也阿弥、左阿弥、金閣を模した三層の楼閣の吉水温泉などが、料亭や西洋料理を供するホテルとなつた。

また明治維新が創りだした「京都らしさ」の象徴として、円山のしだれ桜がある。円山のしだれ桜は、祇園社の執行であった宝寿院が廃されて、築地内の寺塔が、公園の中に一本、そびえ立つものとなつた。円山に隣接する祇園では、

観光と密接に関わった性



上 円山公園のしだれ桜
下 外国人向けに披露された都をどりの
明治時代の彩色写真（いずれも京都新聞出版セントラル刊・白
幡洋三郎『幕末・維新
彩色の京都』から）

園の姉妹

(昭和11年)では、商売の傾いた木綿問屋の旦那が、梅村蓉子演じる芸妓・梅吉の世話になる。

その茶屋が、円山に隣接する四条通北東部の祇園乙部(膳所裏)にあつたことは、旦那の没落を象徴する。

また明治期には、四条通の南側、現

在の華やかな祇園甲部歌舞練場の付近には、定期的に梅毒検査をする駆魔院があつた。

明治41(1908)年の京都市の統計書によると、祇園甲部(四

条通南側、北側西部)の芸妓54

0人、娼妓91人に対して、祇園乙部(四条通北側東部)には芸妓64人、娼妓178人がいた。京都には、祇園をはじめ島原・宮川町・先斗町・上七軒・五番町・七条新地など、花街や遊廓が多くあり、それは観光とうがつっていた。たとえば大正4(1915)年の大正大礼の時には、観光ブームで京都の花街は遊客で賑わった。

もつとも社会における性のあり方は歴史的に変化してきたし、「都をどり」や井上流の京舞に代表されるように、明治期以降、花街から発展した芸能や文化は重要なだろう。しかし昭和31(1956)年の売春防止法制定以前には、公娼制度があり、性と観光も密接に関わっていた。祇園に代表される花街の「京都らしさ」と「もてなしの文化」も、多分に近代に創りだされたものであるし、牧歌的なイメージだけで歴史は語れない。

(京都人文科学研究所所長)